

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 4 月 19 日現在

機関番号：33917

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2015

課題番号：25770013

研究課題名(和文) 自由意志と道徳的責任の判断にかんする心理的メカニズムの実験哲学研究

研究課題名(英文) Experimental Philosophical Study on How We Judge Free Will and Moral Responsibility

研究代表者

鈴木 貴之 (SUZUKI, Takayuki)

南山大学・人文学部・准教授

研究者番号：20434607

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、第一に、質問紙調査によって、行動の責任評価や賞賛・非難にはさまざまな要因が関与していること、そして要因は個人内・個人間で変化することを明らかにするとともに、哲学的な自由意志論はこのような実態をふまえ、常識的な概念枠組の部分的な修正という作業を必要とすることを明らかにした。第二に、いわゆる実験哲学研究の哲学的な意義についてより一般的に考察し、思考実験にかんする人々の直観が対立したり、変動したりする際に、哲学者の専門性などを持ち出して直観の信頼性を擁護することは困難であることを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：In this study, we found, through questionnaire, that there are various factors involved in our judgment on responsibility and praise/blame and that factors vary both between persons and between cases within a person. We also found that we have to take these into account in the philosophical study of free will and that we may have to revise our commonsense conceptual framework. Secondly, we examined philosophical significance of experimental philosophy in general and found that it is difficult to defend intuition by emphasizing philosophers' expertise when our intuitions vary or oppose against each other.

研究分野：哲学

キーワード：実験哲学 自由意志 メタ哲学

## 1. 研究開始当初の背景

これまで、哲学の議論において直観が用いられる際には、議論を展開する哲学者の直観が広く一般に共有されているということが、暗黙の前提とされてきた。しかし近年、質問紙調査等の研究手法によって、この前提がつねに成り立つわけではないことが明らかにされつつある。このような研究は、現在では実験哲学という新たな研究領域を形成している (cf. Knobe and Nichols (eds.), *Experimental Philosophy*, Oxford university Press, 2008)。

自由意志の問題は、指示や知識の問題と並んで、実験哲学において早くから研究されてきた。これまでの主な争点は、われわれの素朴な自由意志概念は因果的決定論と両立可能か、という問題であった。この問題にかんしては相反する研究結果が得られているほか、自由意志と道徳的責任にかんするわれわれの判断は、具体例について考えるか一般論について考えるかの違いなど、さまざまな要因の影響を受けることが明らかになっている (cf. T. Sommers, 2010, "Experimental Philosophy and Free Will," *Philosophy Compass*, 5(2): 199-212)。

しかし、自由意志にかんする従来の実験哲学研究は、因果的決定論の問題だけを扱っており、われわれが日常的な場面でどのように自由意志と道徳的責任について判断しているのかは、明らかにされていない。このような状況をふまえて、申請者は、2011年7月より質問紙を用いた調査研究を行っている。この研究の目的は、参加者にさまざまなシナリオを提示し、自由意志や道徳的責任に関連する質問にたいする回答を分析することで、自由意志と道徳的責任にかんするわれわれの判断がどのような要因の影響を受けるのかを明らかにすることである。2011年7月と2012年4月に調査を行った結果、一般の人々の自由意志にかんする判断は意図にかんする判断と強く関連するが、道徳的責任にかんする判断は、自由意志を含め、特定の要因と強く関連するわけではないということが明らかになった。その成果は、2012年6月の *Society for Philosophy and Psychology* および9月の *Workshop for Experimental Philosophy* で発表された。

## 2. 研究の目的

本研究は、上記の研究成果をふまえ、自由意志と道徳的責任にかんする判断の心理的メカニズムについて、さらに踏み込んだ分析を行うと同時に、このような哲学的問題についての経験的手法を用いた研究の意義を明らかにすることを目的とする。具体的には、以下の3点について研究を進める。

(1) これまでの研究成果をふまえ、質問紙調査によって、自由意志と道徳的責任にかんする

判断の心理的メカニズムを解明する。具体的には、下記の点を重視する。

・ウェブ上での調査を導入することによって、より複雑で、より洗練された実験デザインに基づく調査を行う。

・先行研究よりも進んだ統計的な分析手法を導入することにより、判断の心理的メカニズムにかんする因果的なモデルを構築する。

・判断にかんする性差や文化差など、これまでに十分に研究されていない点について分析を進める。

(2) 上記の研究成果が哲学における自由意志論にどのような含意をもつのかを考察する。とくに、以下の問題について重点的に考察する。

・道徳的責任にかんする判断において、自由意志はどのような役割を果たしているのか。

・われわれの自由意志概念や道徳的責任概念はどのような構造を持っているのか。

・われわれの道徳的判断の基準が状況に応じて変化するという見方 (moral variantism) が正しいとしたら、そのことは何を意味するのか。

(3) 哲学における実験哲学一般の意義にかんする方法論的、メタ哲学的考察を行う。とくに、以下の問題について重点的に考察する。

・哲学の議論において直観はどのような意味を持つのか。

・一般人の直観と専門家の直観はどのような関係にあるのか。

## 3. 研究の方法

初年度には、これまでの研究成果をふまえてさらなる質問紙調査を行う。それと平行して、哲学における一般人と専門家の直観の関係について、方法論的な考察を行う。次年度には、質問紙調査以外の手法を用いた調査研究を行うとともに、哲学における直観の役割について、方法論的な考察を行う。最終年度には、それまでの成果をふまえて自由意志と道徳的責任にかんする判断の心理的メカニズムのモデルを提案し、それが哲学における自由意志論にどのような意義を持つのかについて考察する。これらの研究成果については、学会等における研究発表を通じて公表する。

## 4. 研究成果

2013年度は、自由意志と道徳的責任を主題とした実験哲学研究に関しては、これまでに実施してきた質問紙調査のデータを分析した。分析によって、行為の責任に関する判断や賞賛・非難の判断に関係する要因は、個人間でも個人内・事例間でも変化することを明らかにし、その成果の一部を2013年10月に東京大学駒場キャンパスで開催された道徳心理学コロキウムや、2013年12月に名古屋大学情報文化学部大学院全体演習で行った

講演として発表した。

メタ哲学研究に関しては、哲学における直観利用の是非についての論争、とくに、哲学においては一般人の直観ではなく、専門家である哲学者の直観を重視すべきであるという主張をめぐる論争について文献調査を進めた。

そのほか、哲学的な問題を考えるうえで経験科学の研究手法がどのような役割を果たしているかについての事例研究として、美に関する心理学および神経科学研究の意義を主題とした、2013年9月に南山大学で開催された名古屋哲学フォーラムの開催に協力した。

2014年度は、実験哲学研究に関しては、引き続き自由意志と道徳的責任を主題とした質問紙調査とデータ分析を実施した。本年度は、これまでの調査に加えて、一般の人々が他行為可能性についてどのように考えているかということと、熟慮によって道徳的な判断がどのように変化するかということについても、予備的な調査を実施した。

メタ哲学に関しては、2014年5月に関西大学で開催された応用哲学会で、「メタ哲学ワークショップ：哲学に直観は必要か」と題したワークショップを開催し、「哲学者は哲学的直観の専門家なのか」という題で提題を行い、哲学における直観利用の是非をめぐる論争について考察するとともに、自由意志の問題を例として、哲学的探究の本性についてどのような見解があり、そしてどのような見解が最も説得的であるかを論じた。また、2014年6月に慶応大学で開催された科学基礎論学会におけるワークショップ「日本の心の哲学のこれまでとこれから」では、提題者として、「心の哲学は単一の専門領域なのだろうか」という発表を行い、心の哲学を素朴概念の解明とみなす立場や、因果性の領域と対比される合理性の領域の探究とみなす立場は説得的ではなく、自然種の探究とみなす立場がより説得的だが、そのように考えたときには、心理学や神経科学に対する哲学の独自性が明らかではなくなるということを論じた。さらに、2014年9月に豊田工業大学で開催された中部哲学会では、「哲学における直観の信頼性」という題で研究発表を行い、哲学的な思考実験における直観の多様性や不安定性を根拠とした直観利用批判と、それに対する応答について検討し、専門性を根拠として哲学者の直観を擁護する議論や、知覚との類比によって直観を擁護する議論は、いずれも説得的でないことを明らかにした。

2015年度は、実験哲学研究については、これまでに実施した質問紙調査のデータ分析を進めるとともに、他行為可能性概念の内実を明らかにするための質問紙調査とそのデータ分析を実施した。その結果、多くの人は、行為者の心的状態や環境に違いがあれば別の行動をとることが可能であったと考えるが、行為者の心的状態・脳状態および環境がすべて同じだとしても別の行動をとること

が可能であったと考える人は少数であることや、後者の強い他行為可能性を認めるかどうかは、具体的な行動の評価や自由意志に関する一般的な信念とは相関を示さないことが明らかになった。これらの成果の一部は、日本科学哲学会 2015 年度大会におけるワークショップ「道徳心理と社会認知」における提題「自由意志と責任に関する実験哲学研究とその意義」として発表された。

メタ哲学研究に関しては、2014 年度の中部哲学会における研究発表をもとに論文「哲学における直観の信頼性」を執筆し、『中部哲学会年報』への掲載が決定した。

以上の研究成果は以下のように要約できる。第一に、質問紙調査によって、行動の責任評価や賞賛・非難にはさまざまな要因が関与しており、そして要因は個人内・個人間で変化することが明らかになった。第二に、哲学的な自由意志論はこのような実態をふまえ、常識的な概念枠組の部分的な修正という作業を必要とすることが明らかになった。第三に、いわゆる実験哲学研究の哲学的な意義についてのより一般的な考察によって、思考実験にかんする人々の直観が対立したり、変動したりする際に、哲学者の専門性などを持ち出して直観の信頼性を擁護することは困難であることが明らかになった。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計1件)

鈴木 貴之、哲学における直観の信頼性、中部哲学会年報、第 47 号、中部哲学会、2016 年、査読有、印刷中(掲載決定)

[学会発表](計4件)

鈴木 貴之、自由意志と責任に関する実験哲学研究とその意義、日本科学哲学会、2015 年度大会ワークショップ提題、2015 年 11 月 22 日、首都大学東京南大沢キャンパス

鈴木 貴之、哲学における直観の信頼性、中部哲学会、2014 年度大会研究発表、2014 年 9 月 27 日、豊田工業大学

鈴木 貴之、心の哲学は単一の専門領域なのだろうか、科学基礎論学会 2014 年度大会ワークショップ提題、2014 年 6 月 15 日、慶応大学三田キャンパス

鈴木 貴之、哲学者は哲学的直観の専門家なのか、応用哲学会 2014 年度大会ワークショップ提題、2014 年 5 月 10 日、関西大学高槻キャンパス

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

<http://tkykszk.net/research/projects/jps2013/>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

鈴木 貴之 (SUZUKI, Takayuki)  
南山大学・人文学部・准教授  
研究者番号：20434607

### (2) 研究分担者

なし

### (3) 連携研究者

なし